

# 被爆の地獄 語らねば



原爆ドームの前で、平和への思いを語る梶本淑子さん=広島市



2018  
ヒロシマ  
ナガサキ  
地獄でした」  
1957年に結婚。  
2人の子どもを授かっ  
たが、長く記憶を語る  
ことはなかった。孫か  
ら死に働いた。「原爆  
が落ちた日は地獄。で  
も、生き延びた人間も

炎天下にたたずむ広島市の原爆ドーム。終戦から73年目の夏、この地を訪れた被爆者の梶本淑子さん(87)＝同市＝が静かに語った。「ここで一体、どれだけの人が死んだか…。悲しくなります」  
1945年8月6日。あの日、梶本さんは爆心地から2・3キロの工場にいた。当時は同市の安田高等女学校に通う14歳。学徒勤員で飛行機のプロペラ部品を製造していた。

午前8時15分。真っ青な光が、窓から刺すように工場内に入ってきた。「爆弾だ」と直感し、機械の下にもぐり込んだ。地球が爆発したかのような音。体が吹き飛ばされ、

1945年8月6日。あの日、梶本さんは爆心地から2・3キロの工場にいた。当時は同市の安田高等女学校に通う14歳。学徒勤員で飛行機のプロペラ部品を製造していた。

午前8時15分。真っ青な光が、窓から刺すように工場内に入ってきた。「爆弾だ」と直感し、機械の下にもぐり込んだ。地球が爆発したかのような音。体が吹き飛ばされ、

「助けて」「痛いよ」。よううに工場内に入ってきた。「爆弾だ」と直感し、機械の下にもぐり込んだ。地球が爆発したかのような音。体が吹き飛ばされ、

1945年8月6日。あの日、梶本さんは爆心地から2・3キロの工場にいた。当時は同市の安田高等女学校に通う14歳。学徒勤員で飛行機のプロペラ部品を製造していた。

午前8時15分。真っ青な光が、窓から刺すように工場内に入ってきた。「爆弾だ」と直感し、機械の下にもぐり込んだ。地球が爆発したかのような音。体が吹き飛ばされ、

## 18万人に証言

広島市  
梶本さん

かれてしまう」。恐怖の中、何とか中からはい出した。

熱線で全身の皮がめくれ、垂れ下がつた人々が、まるで幽霊のように水を求めてさまよう。梶本さんは右腕にガラス片が刺さったまま、下敷きになつた友人を助けた。担架に載せて運ぶ際、死体を踏んだ時のぬるつとした感触が忘れられない。

放射線を浴びた父は1年半後に血を吐いて亡くなり、母も原爆症で入退院を繰り返した。梶本さんは教師の夢を諦め、母の治療費と3人の弟を養うため、親戚の衣料品店で必死に働いた。「原爆が落ちた日は地獄。でも、生き延びた人間も

これまで伝えた相手は18万人を超える。厚生労働省によると、全国の被爆者は15

19年前、がんで胃の三分の2を切除。やせ細った体で、記憶の風化繰り返してはいけない」（白杵大介）

「青春も、人生も奪った原爆。あの地獄を防ごうと証言を続けたい」（白杵大介）

万4859人（3月末現在）。被爆者健康手帳の交付が始まった1957年度以降で最少となり、平均年齢は82歳を超えた。被爆者の高齢化は著しい。

「なぜ、唯一の被爆国が参加しないのか」。梶本さんの疑惑は晴れないままだ。

米国の核に守られた日本は署名していない。

兵器禁止条約が採択。核廃絶を唱えながら、梶本さんの疑惑は晴れないままだ。

る。

昨年7月、国連で「核